

2012年9月17日
0:20

読書会『夢十夜』（第三夜、第四夜）

夏目漱石 著

こんな夢を見た。

去る六月某日、私は部室に座っていた。夏目漱石の『夢十夜』で読書会を開くためである。私には疑問があった。『夢十夜』とは、いったい何を映し出すべく著された作品であるのかということである。漱石は無意識を意識的に描き出すことに意欲的な作家でしたから、と研究者は云った。夢を媒体に無意識を表現したかったのだ、とも。

第三夜がやってきた。盲目の小僧を森に棄てる話である。あるいは、盲目の百年越しの怨恨譚。一般的には漱石の原罪意識を表した作品だとされる、たいそう有名な話である。「背負った子どもが重く感じる」というモチーフは怪談「子泣き爺」を彷彿とさせるが、件の怪談では肉体的な重圧、第三夜では精神的な重圧、というのが対照的な点である。否、もしかしたら本当に小僧は肉体を伴って重くなったのかもしれない。だがどちらにせよ、純然たる悪夢に相違あるまい。読み進めるうちに小僧の「小僧」性が薄れていく、そういう興味深い話を読書会で聞いた。

第四夜がやってきた。蛇を見せてやるという爺の後を追うと、爺が川から上がってこなくなった話である。半分冗談でこの話を解析すると、これは少年の性的トラウマをモチーフとしているのではないかと読める。蛇は男性性の象徴である。こんなことを真顔で語っているのはフロイト博士ぐらいであるので、この話はいったん脇道においておく。

笛を吹きつつ子供らを川へといざなう爺の姿に、『ハーメルンの笛吹』の構図を見た者がいる。異国の文学作品研究に意欲的な漱石であるので、それを意識していたとしてもなんら不思議ではない。夢十夜自体が『アラビアンナイト』を意識している可能性も指摘された。たいへん短い話であるが、その行間や前提に込められた意図はひろい。

各夜同士の対応関係を探しながら読むこともできる。漱石の内面を推し量りながら読むこともできる。人間の無意識に思いをはせながら読むこともできる。あるいは、単に漱石の文才を楽しむことも。既読者も未読者も、是非この機会に漱石の作品を紐解いてみてほしい。当初の疑問が完全に瓦解したわけではないが、『夢十夜』読解の新たな糸口を得た読書会であった。（式式）